平和の素晴らしさ

師勝中学校　三年　樫村　陸希

僕の知っている言葉をいくら並べても長崎原爆資料館にある写真や資料をあらわせられないと見終わったときにそう思いました。

資料館にあるものすべてが僕の想像をはるかに超えているものであり、そして今の自分では想像も出来ないものだったからです。

そして資料館には「これが現実に今立っている長崎で起きた事なの。」と考えさせられるものばかりでした。たった一瞬でなにもかもなくなっていた当時の写真。ガラスが溶けて手の骨とくっついてしまったものなど…。

その中でも僕が一番印象に残っているのは、黒こげになった母親の死体の隣でただ茫然と立ちすくむ少女の写真でした。

もし自分がその少女と同じ場所に立っていたらと思うと恐怖のあまりに声がでませんでした。

はっきり言って、僕たちは、まったく原爆の恐怖を知っていないと思いました。教科書などで知るだけの知識では表せられないものを、突き付けられたことでそう思わされました。

２日目には「被爆六十七周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参加しました。とても多くの人がいて外国人の方も多くいました。

そして午前十一時二分に黙とうをしました。目をつぶる一分間に僕は、今まで見てきた写真などが浮かんできました。「六十七年前に原子爆弾がおとされたのだ」という事実を感じ自然と鳥肌がたち、なぜ戦争なんてしたのだ、なぜ、無差別な原子爆弾なんか落したのだと怒りを感じました。

原爆の事を考えると思い浮かべてしまうのは原発の事故です。核の恐怖を知っているはずの日本でこんな事が起きてしまったことがとても悲しく思いました。だから僕は人間では抑えきれない核を乱用することは戦争と同じなのではと思いました。

僕は今回の「平和の使者」に参加することが出来てとてもいい経験になりました。

この二日間から僕が思った事は「平和ってすばらしい」という事でした。原爆なんて幸せを破壊するものでしかありません。原爆ではなにも得ることはできないのです。

そのことを、長崎市を始め、原爆を反対するすべての人が、叫び続けてきたおかげで現在、核廃絶に向けた活動が活発化されてきています。

現在被爆者の平均年齢は七十七歳を超えました。だからこそ未来を担う僕たちが原爆のおそろしさをしっかりと学び、未だ世界中にある原爆がすべてなくなり戦争がない世界にするため平和を叫び続けたいと思います。

そのためにも平和の使者として多くの人に学んだ事を広めていきたいと思います。

長崎で学んだこと

西春中学校　三年　木村　雛乃

「残酷、衝撃、恐怖、悲痛…」私の知っている言葉をどれだけ並べても、ぴったりと当てはまる言葉が見つかりませんでした。私が初めて知る戦争の「真実の姿」が訪れた原爆資料館にあったのです。そこにはガラスの突き刺さったボロボロの服、溶けて変形した瓶、皮膚が焼けただれてむき出しになった心臓の動きが分かるほどの写真など、たくさんの資料が展示してありました。この平和な日本に現実に起きたこととは、とても信じられませんでした。しかし、私の中でふと昨年三月の福島第一原発による放射能の事故と、六十七年前の長崎とどこか重なり、息苦しくなるほどの胸の痛みを感じました。みなさんは、この二つを全く違うものだと感じていませんか。戦争は人間が起こすもの、原発事故は天災によるものだと。私もその時までそう思っていましたが、果たして本当にそうなのでしょうか。戦争は宗教・人種・政治・貧富の差など様々な原因で起こり、力ずくで自分達の考えを通そうとする「人間の欲」そのもので、核兵器はその最たるものです。一方、原発事故もより便利により多くのものをと求め続けた「人間の欲」が作り上げた原子力に対し、自然が警鐘を鳴らしたのだと思います。つまりどちらも私達人間が作り出したものなのです。自分達が作ったものを自分達で制御できているのでしょうか。今こそ、私達は真剣にこの問題と向き合い、考え直していく時にきているのではないでしょうか。

しかし、人間が作りだした核兵器ならば、人間の力で廃絶することも可能なはずです。核兵器を持つことで守られる国など本当に平和と言えるのでしょうか。今でも核を保有している多くの国の人達に考えてほしいのです。本当の平和とは何なのかを。

平和祈念式典では、黙祷と共に平和の鐘の音が鳴り響きました。その場所にいた多くの人達は、年齢も性別も国籍もそれぞれ違います。しかし、「平和」への願いは一つになり、鐘の音にのり日本中、いや世界中に広がっていくようでした。

私達は世界唯一の被爆国として、日本はもちろん国境を越えて世界中の人々が、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けて力を合わせていけるよう、この悲しい歴史を伝えていく責任があります。しかし、私には何の力もありません。けれでも、長崎で学んだ「真実の姿」を忘れ去られないように家族や友達など、まずは身近な人達に伝えていくことはできるはずです。どんなに小さな歩みでも未来へ繋げていくことこそが「世界平和」への第一歩だと思うからです。

最後に、原爆の犠牲者の方々が安らかに眠れますように、そして、すべての被爆者の方々が「生きていて良かった」と心から思えるような未来であることを祈っています。

平和へ向けて

白木中学校　三年　藤田　翔汰郎

八月八日、僕は、北名古屋市の「平和の使者」として、八月九日に行われる長崎平和祈念式典に参列するために、長崎に行きました。

八日は、原爆資料館を見学し、平和公園の会場の下見に行きました。

資料館には、十一時二分で止まった時計や、原爆の被害を鮮明に再現したものや実物がありました。数多く展示されていたものの中でも特に、顔が焼けただれた人が映ったものはとても人間の顔とは思えず、一緒に参加した友達も、言葉が出ませんでした。

そして、二日目の九日。「平和祈念式典」に参列しました。

会場の平和公園には、朝早くからたくさんの人がいました。その中には、様々な国の人達もいました。

下見をした前日は準備で慌ただしく、会場は少しにぎわっていましたが、式典当日はとても厳かで、毎年テレビで見ていた式の雰囲気を肌で感じました。

式は十時半から始まり、平和宣言や平和への誓いがありました。

十一時二分に行われた一分間の黙祷。鐘の音が一分以上響いているのではないかと思う程、ゆっくりと時が流れ、僕は犠牲となった方々に祈りを捧げました。

僕は、夏休みの間、大好きなテニスを止めようと思っていました。元々、上手ではないし、その上、思う程上達していかない。そんな中でテニスを続けたって、周りに迷惑をかけるだけ。そんなことなら、勉強して高校生活をテニス以外で楽しもうと考えていました。

しかし式典に参列し、被爆者だけでなく、全世界の戦争で亡くなった人のことを考えると、亡くなった人達はしたい事があっても、することができなかったのだと気づきました。今の自分は、したい事ができる状況なのにしない。そんなのは亡くなった人達に失礼だと思いました。もちろんスッパリ決められたわけではありません。自分がテニスをしている時に、友達が遊んでいることがうらやましかったし、テニスより友達と遊ぶ方が楽しいとも思いました。でも、式典で思った亡くなった人達に対して失礼だということが、自分の中で大きくなり、僕はテニスを続けて、迷わず前へ進んで行くと決意しました。

夢を持っている人はその夢を叶える努力を、夢を持っていない人は夢を見つける努力をして欲しいです。したい事ができる環境にいるなら、ぜひ必死に取り組んで欲しいと思います。

僕は、戦争で亡くなった人達のことを考え一日一日をムダにせず、一生懸命生きる事を平和の使者として学びました。皆さんも、戦争について考えましょう。それが僕達の使命なのではないでしょうか。

核兵器の恐ろしさと平和について

訓原中学校　三年　亀川　雅仁

六十七年前の八月九日、長崎に原子爆弾が投下され、一瞬の爆風・熱線・放射能で万単位の尊い命が奪われました。またかろうじて命を取りとめられた方の中にも、心と体に大きな傷を受けられ、今もなお苦しんでおられる方がいます。

平和の使者派遣事業への参加が決まってから、原爆に関することを学ぼうと、原爆投下後、治療にあたられた長崎医科大学の先生が書かれた本を読みました。少しの知識を得たつもりでしたが、原爆資料館で見聞きしたことは想像を絶し原爆の恐ろしさや悲惨さを強く感じました。十一時二分で止まっている時計、体中の皮膚がただれている写真、全身火傷の女の子の写真など、見るも無残なものばかりで…。中でも一番衝撃をうけたのは、人間の手の骨とガラスが高熱のために溶けてくっついているものでした。過去、この日本で現実にあった出来事だという認識さえできないぐらいの光景でした。「過去のことだ」、と一言でかたずけてしまうことは、とうてい考えられないむごさです。未来永劫このことを伝えていかなければならないとも思いました。

現在、世界にはまだ数万発の核兵器が存在しているそうです。どうして核兵器をなくそうとしないのでしょうか。核兵器を保有する国は、保有することで相手の国の核兵器で攻撃されないことが平和だと考えているのでしょうか。単純に考えれば世界が一斉に「核兵器をなくしましょう。」と実行できれば、もっと簡単に平和になると考えるのはおかしいでしょうか。そんなに難しいことなんでしょうか。

今回、平和の使者派遣事業に参加させていただき、今までの自分の十五年間がどれほど平和だったのか、いかに自分がのうのうと暮らしてきたのかに気付きました。平凡な、なんでもない営みがどれほど幸せで楽しいことか、当たり前のことを当たり前にできることが、実は当たり前ではないことにも気付きました。今の生活を一瞬で壊してしまうものがまだこの世に存在する恐ろしさも認識しました。

核兵器をなくさずして、恒久平和はあり得ないと僕は思います。これからを生きる自分たちに課せられた使命の一つとして、唯一の被爆国の一員として、核兵器の廃絶に寄与していきたいという思いを強くしました。そして、昨年の福島原発事故後の対応など、放射能に脅かされることの無い社会の構築にも、当時者意識を持って、携わっていくことが自分達の責任だと思ってます。

最後に、今回の事業に自分達が参加することを支えていただいた方々に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

長崎の鐘の音

熊野中学校　三年　安藤　友里恵

一九四五年八月九日、長崎に一発の原子爆弾が投下されました。一瞬にして長崎の街はほとんどが破壊され、爆風、熱線、放射能によって、約一五五四六人の命が奪われました。かろうじて生き残った人々も心と身体に大きな傷を負い、今もなお苦しんでいます。

長崎訪問初日。私はその被爆地の姿を「長崎原爆資料館」で直に見ることができました。頭の中では、ある程度想像していましたが、そこには、私の想像をはるかに超える恐ろしい姿の写真が写しだされていました。全身やけどを負って皮膚が焼けただれた少女。高温の熱線で人間の手の骨とガラスが溶けてくっついているものなど、どれも私の心を苦しくさせるようなものばかりで、あまりの悲惨さに言葉がみつかりませんでした。

資料館で最も私が印象に残ったもの。それは、最初に目にした「午前十一時二分」で止まったままの柱時計。爆心地より約八百メートル離れたところにあったそうです。爆風により爆発の時刻で止まった、永遠の十一時二分。長崎で本当に原爆が落とされたという事実を、改めて思い知らされたのです。戦争に対する恐怖。核の脅威。それは鳥肌が立つほど恐ろしいものでした。

翌日。私たち平和の使者の一行は、「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参列しました。歩くのもやっとなほど大勢の人が居て驚きました。遺族の方々は平和の像を眺めながら、悲しみをこらえきれず涙を流していました。式典が始まり、長崎の鐘と共に黙とうを捧げました。鐘の音は会場だけでなく、長崎の街全体に鳴り響きました。私はその音が長崎の「あの日」を思い出させるような長く重い音、そして被爆者の悲しみや怒り・平和への願いがこめられた「言霊」のようにも聞こえました。この鐘の音は今でも私の心に残っています。そして、私は一生この鐘の音を忘れることはないでしょう。

平和の使者として長崎を訪問した私は、たくさんの「何故」を持ち帰りました。何故、多くの尊い命が一発の原子爆弾で失わなければならなかったのだろう？何故、核兵器という恐ろしいものが世界に存在するのだろう？何故、人々は、未だに戦争や紛争を繰り返すのだろう？多くの「何故」は今も私の頭の中から消えません。ただ、ひとつだけ分かったことがあります。それは、世界平和を願う気持ちを持ち続けなければならないということです。戦争のない世界。核の脅威に怯えることのない世界。そんな世界を築き上げる小さな努力を積み重ねなければならないということです。私ひとりでは成しえないことだけど、一緒に参加した平和の使者の仲間も、きっとその役を共に担ってくれるはずです。あの鐘の音が私の心に届いたように、きっとみんなも同じ思いだから。

世界平和へ

天神中学校　三年　山腰　優衣奈

八月九日午前十一時二分、一分間の黙祷を被災された方に捧げました。目をつぶり、前日に見学した原爆資料館で知った長崎の姿を思い浮かべると胸が苦しくなりました。

資料館には原爆の被害にあった物、そして被害にあった方の当時や現在についてのことなど、目をそらしたくなるような展示が多くあります。その一つ一つを見ていくたび、息がつまるような感覚におそわれました。奇跡的に残っていた時計の針は十一時二分をさしたまま止まっており、重たそうな二本のレンガの柱は左右で色も形も違っていました。片方だけが熱線や爆風を受けて、もう片方の柱よりも黒く、そして少しゆがんでしまったそうです。このレンガの柱の状態でも原爆の威力は恐ろしいのだと実感できるのに、現実はもっと悲惨なものでした。何本ものビンが溶けて引っついていたり、その溶けたガラスに人の手の骨が埋っていたり、爆風で割れて飛んできたガラスが大量に服に刺さっていたり。人の皮膚はただれて、今でも苦しまれている方がいます。一昨年あった福島原発事故同様目で見ることのできない放射線に日々おびえていられる方もいます。他にも多くの方々が体だけでなく心に大きな傷を負いながらも生活されています。私はそのことを深く考えもせず、毎日を送ってしまっていました。しかし、それではいけません。自分の足で長崎を訪れ、二日間のあいだに戦争や原爆の残酷さを身にしみて実感し、「何か自分にできることはないか。」と考えました。そしてこの作文などを通して自分の言葉でこの二日間に体験し、感じたことを多くの人に伝えたいと思いました。

まず、私たちは唯一の被爆国の国民として核兵器廃絶を世界に訴えかけていかなければならないということです。地球上には、まだ二万発以上の核兵器が存在しています。一部の国では今なお核実験が行われているのです。私はそれではいけないと思います。世界に核がある以上、私たちに本当の安心が訪れることはないと思います。

もう一つ伝えたいことは戦争は無意味であり、するべきではないということです。先日、シリアで女性ジャーナリストの方が戦争に巻き込まれて亡くなりました。そのニュースを聞いて、私は怒りが沸いてきました。なぜ戦争をしているのか、関係のない人まで巻き込むほど大切なものなのか、と。この方だけでなく、多くの方が戦争によって亡くなられています。尊い命よりも大事なものなどこの世にはありません。そのことを世界中の人が知っているはずです。みなさんもそう思いませんか。

私はこの二つのことをより多くの人に訴えかけて、平和な世界に一歩ずつでも近づくことを望んでいます。